グリムの昔話と類話　1 「ヘンゼルとグレーテル」が生まれるまで

2012 年　小平市中央図書館　民話講座　　岡部由紀子

グリム童話とは？

原題「グリム兄弟が収集した子供と家庭の昔話」
Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm
　ヤコブ・グリム　Jakob Grimm (1785-1863)
　ヴィルヘルム・グリム　Wilhelm Grimm (1786-1859)
　の兄弟が、口伝えされてきた昔話と古今の文献から編纂した物語集

ドロテア・フィーマンに話を聞く兄弟

Märchen（メルヘン）の定義
1. 作者をもたない民間に口伝えされてきた話 … Volksmärchen
　民間説話 … 昔話、民話、伝説、おとぎ話
2. （民間伝承をもとに）作家が創作した話 … Kunstmärchen
　創作童話

　グリム童話は、ドイツ古来の民間説話の集大成か？
　語り手は？

初稿から決定稿まで 47 年の歳月が流れた
　1810 年　初稿（草稿、1920 年に発見される）　1812, 1815 年　初版　　1819 年　第２版
　1837 年　第３版　1840 年　第４版　　1843 年　第５版　　1850 年　第６版　　1857 年　第７版

　版を重ねた理由は？

19 世紀は、昔話の戦国時代
　語られる話から、読む話へ
　不可思議な話から、合理的思考に沿った話へ
　大人の娯楽から、子供のための教訓話へ
　競合した昔話集　ルートヴィッヒ・ベヒシュタイン『ドイツ昔話集』1845 年など
　グリム兄弟は、民間説話から創作童話への橋渡し役、かれらの切った舵は、昔話の進路を変えていく。

ヘンゼルとグレーテル　Hänsel und Gretel　KHM15

グリム兄弟による『グリム童話の注釈本』**1856** 年
　ヘッセン地方のいくつかの伝承がもと　（カッセルのヴィルト家の人が語った話ではないか？）
　類似した民話を列挙
　　ドイツ語地域（アルザス、ハルツ、チロル、シュヴァーベン他）
　　デンマーク、スエーデン、ハンガリー、アルバニア、セルビア、フランス、イタリア

「ヘンゼルとグレーテル」と似ている昔話 ― グリム以前に書かれたもの

１.「ふたりの子を持つ女のとんでもない話」または「地の雌牛」　参照:資料 3
マルティン・モンターヌス（1537?-1566?）『滑稽話集』 1560 年
アルザスで記録された話、ドイツ語で書かれた最古の昔話のひとつ

2. 「ニッニッロとネッネッラ」　参照:資料 4
ジャン・バティスタ・バジーレ(1583?-1632)『ペンタメローネ（五日物語)』1634-6 年 イタリア
古い伝承をナポリ方言で再話、ヨーロッパで最初の本格的な昔話集

3. 「親指小僧」
シャルル・ペロー（1628-1703）『がちょうおばさんの話』1697 年　フランス　参照:資料 5
民間伝承とバジーレなどが書きとめた話を、当時の趣向にあわせて脚色を加えて読みやすく改変。
グリム兄弟は、『がちょうおばさんの話』から数編を『グリム童話集』に取り入れているが、「親指小僧」は「ヘンゼルとグレーテル」と重なる部分が多いので避けた。

4. 「灰かぶりのフィネッテ」
オーノワ夫人　Marie-Catherine d'Aulnoy (1650? – 1705) 『魔法使いの物語』1698 年　フランス
３姉妹の王女が落ちぶれた両親に荒野に捨てられるが、末娘が名付け親の助言で糸や灰をまいて 2 回帰宅。
３回目は豆をまいたので鳩に食べられ道に迷う。姉妹は人食いと老婆が住んでいる館へたどり着くが、
末娘の機転で人食いは窯で焼かれて灰になり、老婆は首を落とされる。話の後半は「灰かぶり」と類似。

話の構成要素

1. 親に嫌われるか、口減らしのため子供が森（異界）に棄てられる。
2. 子供は、帰路の目印となるものを残す。
3. 目印を辿って森（異界）から帰還
4. 繰り返される子捨て
5. 帰るための目印の喪失（鳥や動物に食べられる）
6. 森（異界）の中で迷う。
7. 助言を与えるもの、道案内をするものに出会う。
8. 人間ではない者の住処にたどりつく。
9. 庇護を受け、ご馳走（食べ物）を与えられる。
10. 試練（労働、食べられそうになる、禁忌）にあう。
11. 試練を経て、人間でない者に打ち克つ。/　試練に耐えて認められる。
12. 人間でない者から、貴重なものを奪い取る。/貴重なものを褒美としてもらう。
13. 貴重な物を携えて帰還し、幸せを手に入れる。/　身分の高い者と結ばれる。
14. 親にかわいがれている子供がそれを羨み、同じように森（異界）へでかける。
15. 助言者の言葉を無視する。
16. 怠惰や強欲のため、試練に耐えることができない。
17. 罰としてひどい目にあう。

グリム兄弟の「ヘンゼルとグレーテル」は、１から１３で構成されている。

初稿（1810 年）と第７版（1857 年の決定稿）

参照:資料 1, 2

	＜初稿＞	＜決定稿＞
題名	兄と妹　/　弟と姉 Brüderchen und Schwesterchen	ヘンゼルとグレーテル Hänsel und Gretel
文体	簡潔な叙述	心理状態や細かな情況説明、会話体が増える
目的	昔話を記録する	子供を意識した読み物
両親の描写	気弱なお父さん 現実的で非情なお母さん	子供を憐れむ気持ちが強いお父さん 子供を忌み嫌う継母、夫に対して高圧的
貧困	きこりの一家にパンがなくなる	国全体が飢饉に苦しむ
困ったとき	兄妹で慰め合う	兄妹で慰め合い、神様に祈る
森の小さな家	森で迷って３日目にたどり着く	白い鳥に導かれてやってくる
家からの声	二人は驚く	「風だ、風だ、天の子だ」とした たかに答える
家の住人	小さな(年取った)おばさん eine kleine (alte) Frau	とても高齢のおばあさんが、松葉杖にすがりながら､そろそろと出てきた　eine steinalte Frau
パンの家の目的		魔女が子供たちをおびき寄せるために建てた
魔女の特性		目が悪い、嗅覚が鋭い、子供を食べる
ヘンゼル殺し	「一緒に兄を殺して茹でるんだよ」	「あたしは、明日兄さんを殺して茹でるんだ」
パン生地	パン焼きの前夜にパン生地作り	パン焼きの当日「もう生地はこねてある」
パン窯にグレーテルを誘う	「板の上にのって、パンがもうすぐ焼き上がるかどうか見ておいで」	「這って窯にお入り。パンを入れてもいいぐらい、十分熱くなっているかどうか見ておくれ」
老婆をパン窯に	老婆を板に座らせ、窯に押しこむ	頭を窯につっこんだ老婆を背後から突き飛ばす
老婆は	魔女は焼け死んだ	おぞましい声をあげて罪深い魔女は焼け死んだ
家へ帰路		カモの背中に乗せてもらい、大きい川を渡る
父親	金持ちになった	心配事は消え、みんなで楽しく暮らした

決定稿では

タイトルが変わった。「兄と妹」という別の話 (KHM11) が初版から加わっているため。
善を体現するものと悪を体現するものを、はっきりと対比する。
実母から継母へ。
キリスト教のモチーフが加わる。
性悪な魔女であることを強調し、グレーテルの魔女殺しを正当化。

パンのモチーフは変わっていない

家にパンがなくなる。
森に置き去りにされる子供にはパンが渡される。
ヘンゼルは帰り道の目印にパンをまく。
森の中の家は、パンでできている。(屋根はケーキで、窓は砂糖)
魔女はパンを焼く。グレーテルがパン焼きを手伝わされる。
パン窯での魔女の死

パン窯に老婆を入れる場面の変化

初稿では、グレーテルがおばあさんをパンスコップにのせて窯に押し込む。窯の火は落ちている。
決定稿では、グレーテルがおばあさんの背中を突いて窯の中に倒す。窯からは炎が吹きだしている。

当時書かれた類話では、二つの型に別れる。

1. パンスコップで押し込む

ノイルッピンの一枚絵「マルティンとイルゼ」1835/40 年
Neuruppiner Bilderbogen „Martin und Ilse“

フランツ・ボッツィの挿絵　1839 年
ein Märchen bey Georg Franz

カロリーネ・シュタール「砂糖菓子の小さな家」1821 年　　参照:資料 6
お前たちパンスコップの上に座りな、窯に押し込むからと命じた。魔女のおばさん、いったいどうやるのか、見せてちょうだいと、グレートヒェンは頼んだ。老婆はパンスコップの上に座ってみせた。急いで子ども達はパンスコップをにぎり、人食い女を窯に押し込んだ。

2. 背後から突き飛ばす

アウグスト・シュテーバー　「卵菓子の家」　『アルザスの昔話』 1842 年
パン窯には火が赤々と燃えていました。老いぼれの馬鹿な魔女は、腹這いになってパン窯に入りました。グレーテルは素早く一突きし、窯の奥へと魔女を押し倒し、扉を閉めました。

テオドール・ホーゼマンの挿絵　1868 年
ドイツ一枚絵「ヘンゼルとグレーテル」
Deutsche Bilderbogen Nr.53
Theodor Hosemann
グレーテルが魔女を背後から突いて、
パン窯に押し込もうとしている。
窯では薪がめらめら燃えている。

「卵菓子の家」にでてくる表現を、グリムが借用したのは 1843 年の 5 版から。
それ以降のほとんどの類話、オペラ、童謡は、老婆を背後からパン窯の中へ突き飛ばすという筋。
→　パンスコップにのせて老婆をパン窯に押し込むという筋のほうが、古い形の伝承と思われる。